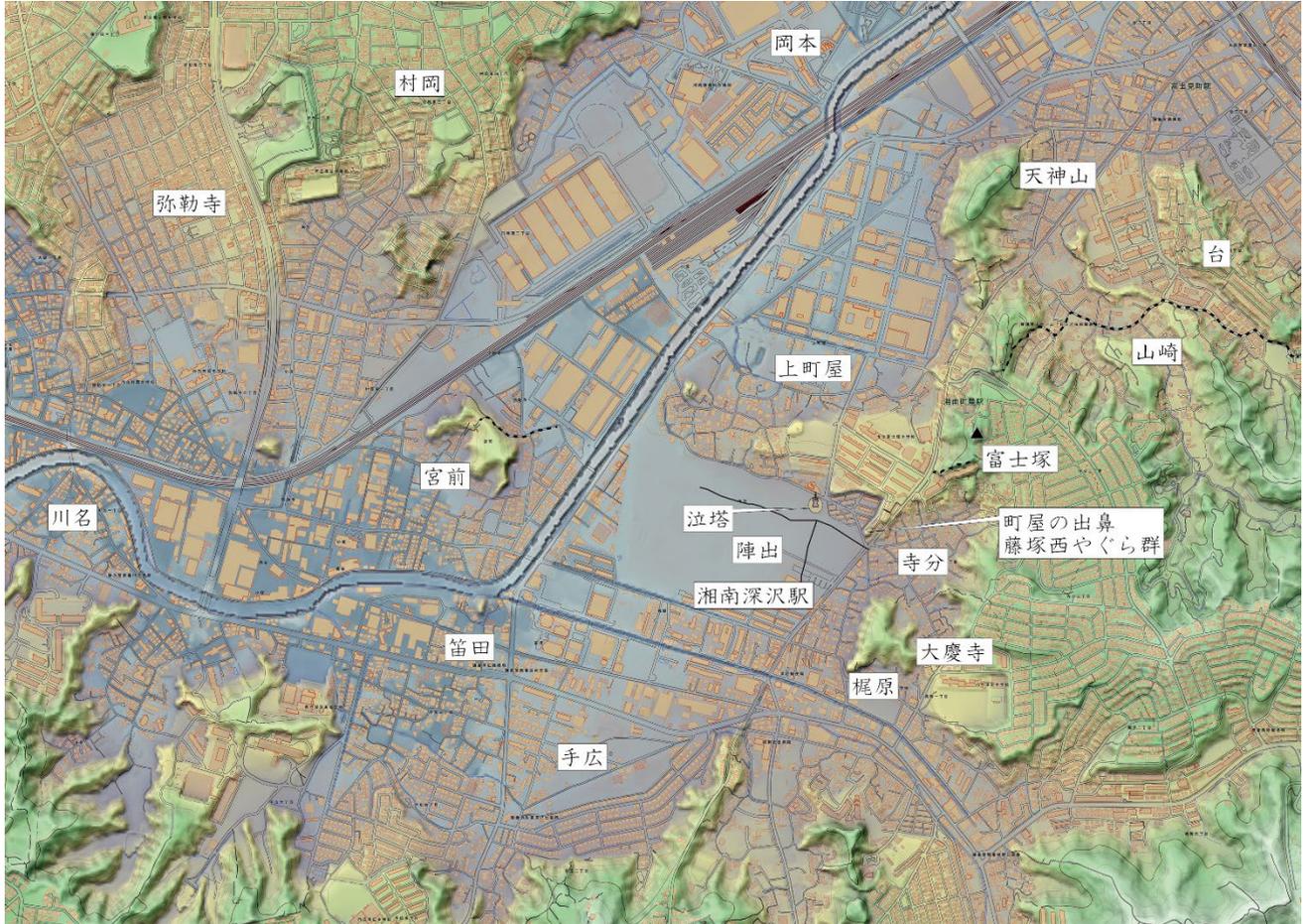


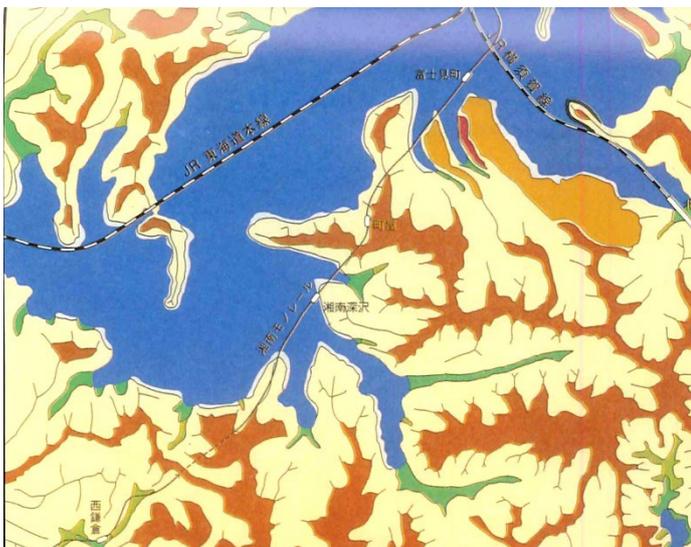
陣出と深沢周辺の歴史を探る

神奈川大学非常勤講師 古田土俊一

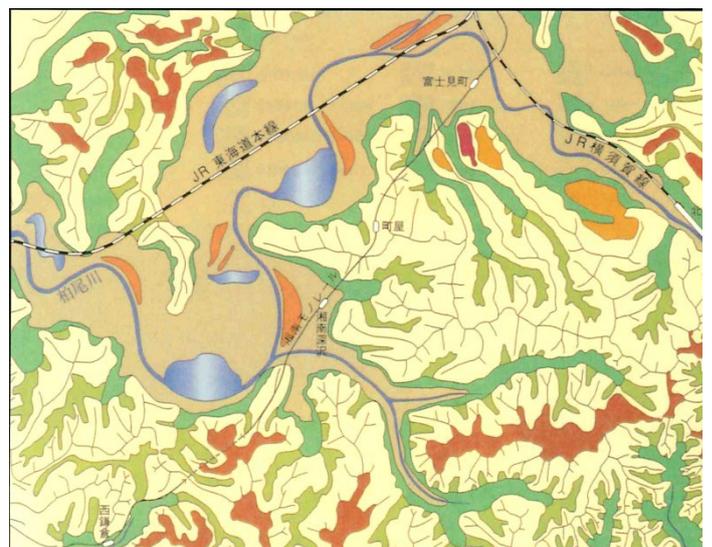
◇現在の陣出と深沢地域



◇地形の変遷



縄文時代前期



中世

◇各地名の初出

【陣出】 泣き塔のある辺りと呼ぶ。新田義貞の鎌倉攻めに際し陣があったことに由来するという。

【深沢】 初見は養和元年（1181）の記事で、以下の通りのちには大仏が建立されている。ほか深沢郷という呼び方が鎌倉期から戦国期にかけて存在し、元久二年（1205）の関東下知状に「相模国南深沢郷」、嘉暦三年（1328）に「相模国北深沢郷」とあり、南北に分かれていた。北深沢郷は鎌倉市台・山崎・梶原・寺分に相当し、南深沢郷は常盤・長谷・笛田・津地域と推定されている。

養和元年(1181)9月16日	頼朝と敵対した足利俊綱が腹心の桐生六郎によって殺害。足利俊綱の首を持って鎌倉にやってきた桐生六郎に、頼朝は鎌倉中へ入ることを許可せず、深沢を通過して腰越へ向かわせるよう命じた。
文治2年(1186)9月7日	源頼朝が「由比」「深沢」を歴覧した。岡崎義実が食事を用意。
嘉禎4年(1238)3月23日	今日、相模国の深沢里の大仏堂の事始め。僧浄光が勧進して、この営作を成し遂げるとのこと。
嘉禎4年(1238)5月18日	相模国の深沢里の大仏の御頭を挙げた。周囲は八丈(24mほど)なり。
仁治2年(1241)3月27日	深沢の大仏殿が上棟された。
寛元元年(1243)6月16日	深沢村に一字の精舎を建立し、八丈(24m)余の阿弥陀像を安置した。

【梶原】 平安中期の漢和辞典「和名類聚抄」に鎌倉郡梶原郷とあり、梶原氏の名字の地にあたる。鎌倉権五郎景政を祀る鎮守の御霊神社、深沢小学校の裏手の景時の墓（やぐら）があり、仮粧坂へ至る途中には「御堂屋敷」という谷戸、その付近の「まんどころ」の小地名は中世前期の有力武士の館が存在した可能性を示す。戦国期には洲崎の一部とされ「須崎梶原分」とある。

【寺分】 村内に鎌倉十刹の大慶寺があり、中世末に付近一帯は洲崎とよばれていたのが、「洲崎大慶寺分」を略して寺分となったか。初見は天文16年（1547）に武蔵比企郡三保谷の養竹院（比企郡川島町）に「須崎大慶寺分」の支配を小田原北条氏が安堵している文書。永禄9年（1566）には「須崎大慶寺分」を円覚寺帰源庵に安堵し、天正12年（1584）には「須崎寺分」と呼ばれている。大慶寺は靈照山と号する臨済宗円覚寺派の寺院で、開山大休正念、開基長井氏とする。正安元年（1299）には無象静照が住持し、元亨3年（1323）の北条貞時十三回忌には僧衆83名が参列。室町時代には関東十刹となるなど高い寺格。

【山崎】 丘陵の突端の天神山の出先にあるので山崎村と称したという。貞治6年（1367）に関東公方足利基氏から万寿寺住職となるよう命じられた義堂周信が、固辞し円覚寺を出て隠れたのが「山崎」だった。康正3年（1457）には円覚寺の黄梅院領として「相州山崎村」「山内庄山崎郷」と呼ばれていた。江戸末期には、天神山の西裾に小字「湯之本」があり、鉱泉が湧き出していた。付近に「熱海」の小字あり。北野神社が立地する天神山は縄文・弥生のほか古代の遺物が多く出土しており、古くから信仰の山として知られる。山上の境内に150cmほどの宝篋印塔が立ち、応永12年（1405）の銘がある。

【洲崎】 寺分・梶原・山崎一帯の古称。須崎とも書き、元弘3年（1333）5月、鎌倉幕府滅亡の際、新田義貞軍と、北条軍とが対峙した古戦場。「太平記」には新田軍を防ぐため、武蔵・相模・出羽・奥州の軍六万余騎を率いた執権北条守時が五月一八日洲崎に向かい、日に5、6度白兵戦を敢行したが、ついに非勢とみて切腹し、侍大将南条高直ら90余人も自刃。攻撃軍は18日夜、山ノ内まで侵入に成功したという。「梅松論」には「武蔵路は相模守守時、洲崎千代塚において合戦をいたしけるが、是も討ち負て一足も退ず自害す、南条左衛門尉并安久井入道一処にて命を落す」と記している。この洲崎千代塚の所在は、寺分村あるいは台村の南部といわれるが不明。長禄4年（1460）には「北深沢郷内」の「台・州崎両村」

と呼ばれ、ほか「須崎あたま」「須崎梶原分」「須崎大慶寺分」という呼び名から、当時の洲崎は山崎村・梶原村・寺分村などを含む地域であることがわかる。

陣出の泣塔は 203 cmの大型の宝篋印塔で、新田義貞鎌倉攻めの際の戦死者の骨を集めて供養のために建てた塔といわれているが、基礎に刻まれた銘文には「願主行浄 預造立 石塔婆 各々檀那 現世安穩 後生善処 文和五年（1356）丙申 二月廿日 供養了」と明記されており、付近にあるやぐら群に葬られた人への供養塔であろうといわれる。手広の青蓮寺に移された時、旧地に帰りたいと毎夜すすり泣きをしたとか伝えられ、泣塔と通称されるようになった。

【上町屋】もとは洲崎に含まれていたか。江戸期の正保国絵図には「町屋」、元禄国絵図には「上町谷」とある。鎌倉道が村内を通過していることから商工業が栄えて町屋ができていたか。泉光院はもと青蓮寺末の真言宗大覚寺末の寺院。天満宮はもと泉光院持ちで上町屋の鎮守。

【宮前】正保国絵図には「宮野前村」とある。柏尾川右岸の丘陵にある御霊神社は祭神に早良親王・鎌倉権五郎景政などを祀る。縁起によれば天慶3年（940）平（村岡）良文による創建。

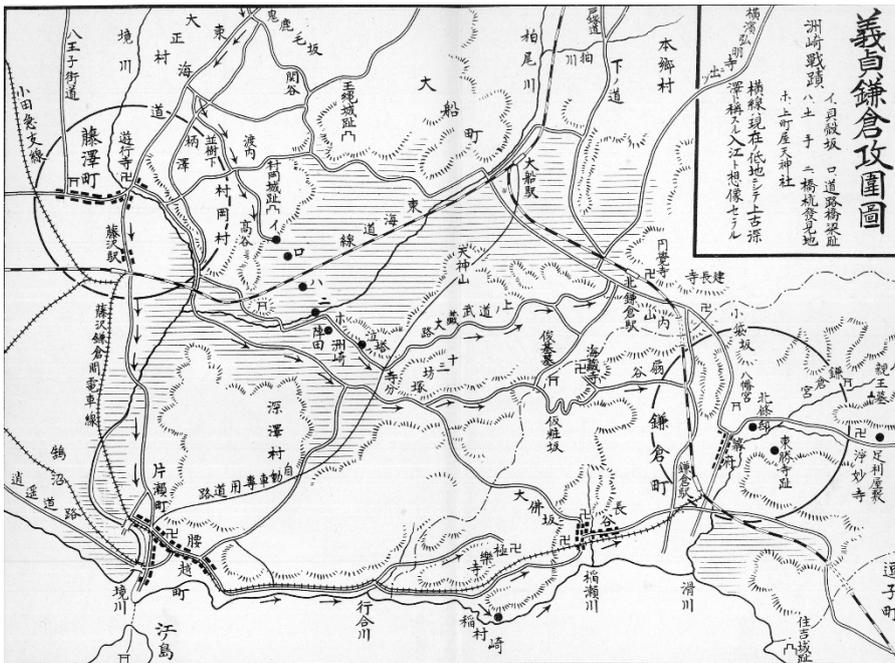
【笛田】中世の津村郷に属すると伝える。戦国期史料に「笛田」とある。

【手広】中世の津村郷の内と伝える。天正19年（1591）青蓮寺宛ての史料に「手広村」とみえる。

【台】宝徳2年（1450）「北深沢郷」史料に「台八人御百姓等沙汰」などとみえ、長禄4年（1460）には「北深沢郷内」の「台・州崎両村」と呼ばれている。

【津】「吾妻鏡」建仁2年（1202）に「相模国積良（つむら）」辺りに名木の古い柳のあることを聞いた将軍源頼家が、出かけてその木を幕府の鞠御壺に移植した。南深沢郷の地頭職を相伝していたのは三浦一族の和田氏で、生き残った高井重茂の後家の津村尼は仁治2年（1241）、子の高井高茂に「みなみふかさのうち、つむらのやしき・てづくり」を譲渡している。以後、譲与は応永19年（1412）まで続く。「風土記稿」によれば津村のほか腰越村・笛田村・手広村、川名村が中世の津村郷という。

◇新田義貞の鎌倉攻め

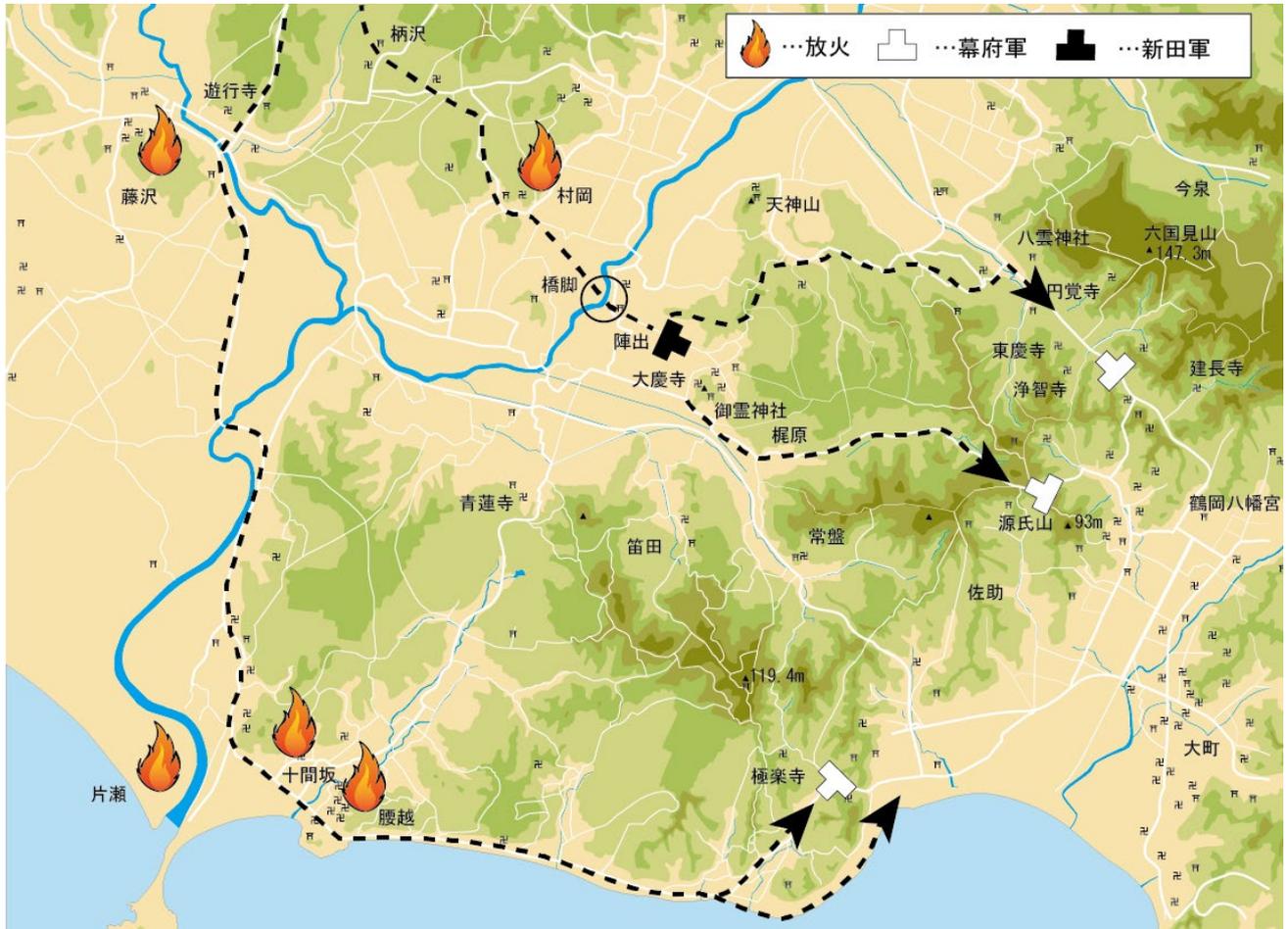


【太平記】「(前略) ココニテ此勢ヲ三手ニ分テ、各二人ノ大将ヲ差副ヘ、三軍の帥を令司ラ、其一方ニハ大館二郎宗氏ヲ左將軍トシテ、江田三郎行義ヲ右將軍トス。其勢総テ十萬餘騎、極楽寺ノ切通ヘゾ向ハレケル。一方ニハ堀口三郎貞満ヲ上將軍トシ、大嶋讚岐守々之ヲ裨將軍トシテ、其勢都合十萬餘騎、巨福呂坂ヘ差向ラル。其一方ニハ、新田義貞・義助、諸將ノ命ヲ司テ、堀口・山名・岩松・大井田・桃井・里見・鳥山・額田・一井・羽川

『建武中興』1934 建武中興六百年記念会神奈川県支部よりの引用図

以下ノ一族達ヲ前後左右ニ圍セテ、其勢五十萬七千餘騎、假粧坂ヨリゾ被寄ケル。(後略) →新田は軍を三隊に分ける。一つは極楽寺切通し、一つは巨福呂坂、一つは化粧坂を攻める。

・次いで周囲五十余ヶ所に放火「(前略) 結句五月十八日ノ卯刻ニ、村岡・藤澤・片瀬・腰越・十間坂・五十余箇所ニ火ヲ懸テ、敵三方ヨリ寄懸タリシカバ武士東西ニ馳替、貴賤山野ニ逃迷フ。(後略)」
…遊行寺 (この頃は藤沢市西俣野付近) の他阿弥陀仏 (安国) 五月二十八日の手紙 (元弘三年 (1333))
「鎌倉はをひたしきさはぎにて候つれとも、道場は殊に閑に候つる也、」 →鎌倉で騒ぎ。道場は静か。



柏尾川は大正 13、14 年に現在のまっすぐな河川へと改修。この工事の際、川底から橋脚が出土したとい
い (『建武中興』図「ニ」地点)、建武記念会は村岡から陣出への直線的なルートを想定。

◇千代塚候補地その 1 と陣出の開発

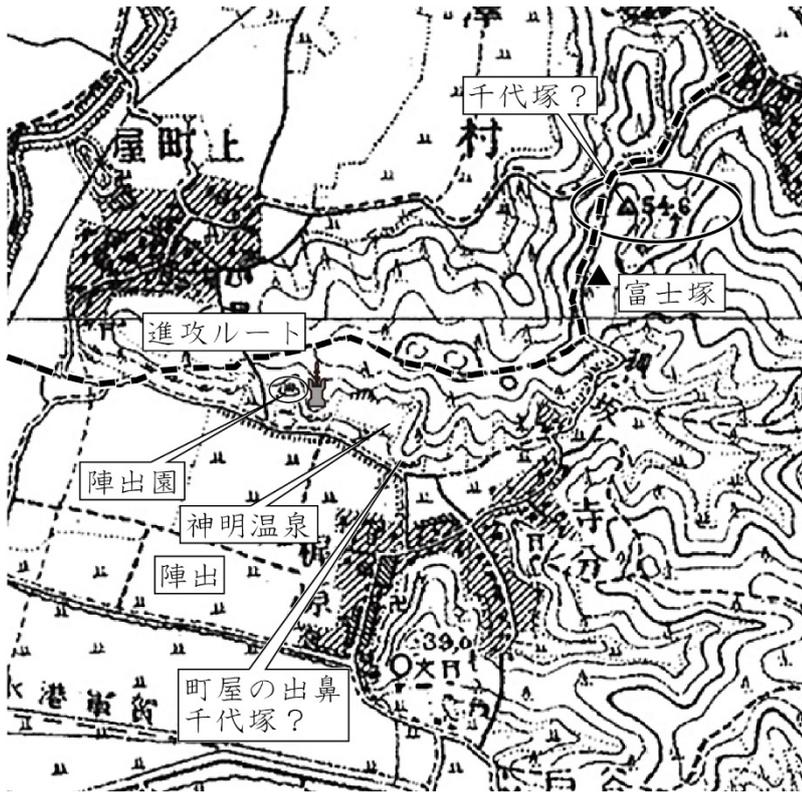
『梅松論』「武蔵路は相模守守時。すさき千代塚にをいて合戦を致しけるが。是もうち負けて一足も退ず
自害す。」

鎌倉街道上ノ道は化粧坂から藤沢市柄沢を通過して府中・上野へ抜ける道で、武蔵路とも呼ばれる。

・『武相叢書』考古第 1 編 (考古集録第 1) 武相考古会 (昭和 9 年 [1934])

(大正 14 年 [1924] の調査)

「即ち深澤村寺分六五六番地神明温泉岩壁信三氏宅裏の丘陵の突角は町屋の出鼻といつて、大層見晴ら
しのよい地点であって、従つて用がない所で古来事ありげな所だといふことを直感させるが、果せる哉、
昨秋此の突角の土砂が崩落して奥行二尺許、間口二尺四寸五分、高さ三尺四寸の横穴が現はれ、其の中
に高さ二尺四寸位の五輪塔が数十基ぎつしり並んで居るのが発見され、また其所から高さ四寸八分其の中



顔面の部分だけが一寸七分の坐像の石佛が出て、更に長さ一尺六寸から二尺六寸までの板碑が六枚出たのを見付けた。それから其の突角の頂を調査して宝篋印塔の上部を三個発見したのであった。」

・『鎌倉－史蹟めぐり会記録－』第2回史蹟めぐり（昭和7年〔1932〕5月8日）

「此踏査で、深沢村寺分にある古戦場千代塚の所在を確かめ得た。（中略）塚は神明温泉の裏山にあって、下の矢倉には五輪塔や板碑が散在して居る。」

・第88回史蹟めぐり（昭和15年〔1940〕10月20日）

「『千代塚とってゐたのは此処でしたね。』と神明温泉の所に来た時其上の

山を仰いで言ふ。ふと見ると温泉宿の裏崖にやぐらがある。五輪塔が見える。」

・清田昌弘 2007「深沢村の海軍工廠」『かまくら今昔抄60話』冬花社

昭和17年（1942）1月、横須賀海軍工廠造兵部の疎開工場用地として12万坪の買収はじまる。

同年9月末、稲の収穫を待ち構えて北側の山地切り崩しが突貫作業で行われた。このため用地内にあった陣出園と引湯をしていた神明温泉の2軒のラジウム鉱泉宿は閉鎖された。泣塔一帯も切り崩される計画だったが、住民が削平に反対。古くから様々な言い伝えがあり、周辺の削平作業中に怪我人が出たことから当局も保存・供養につとめた。



・進藤和子 2020「鎌倉にあった温泉旅館」『近代史資料室だより』鎌倉市中央図書館近代史資料担当

寺分の温泉 山が迫る泣き塔の前の田から湧出していた源泉を、櫓を組んで手押しポンプで上げて配湯していた。泣き塔の西隣に陣出園、東隣に神明温泉があり、神田温泉については不明である。ともに大正期に創業し、昭和17年に海軍工廠に接收され廃業した。この時に一帯の低い丘陵を崩して道路にし、地形が変わった。

○昭和21年米軍撮影航空写真

・鎌倉市中央図書館近代史資料収集室・CPC の会 2004『鎌倉・太平洋戦争の痕跡』鎌倉市中央図書館
横須賀海軍工廠深沢分工場 (1) (2)「防空壕の穴や地下工場が今の市営住宅の下に掘られた。」

「空襲警報が出るたびに、工場のはずれにある地下工場（と称されるが、実際はただの横穴に工作機械を置いただけのものであった）に避難した。」

・『かまくら子ども風土記』昭和 32 年(1957)版。

東光寺「境内には陣出から持ってきた五輪塔や宝篋印塔が散在しています。」

神明社・諏訪社のあたり「この辺にあった九輪の塔の一部は、東光寺や寺分の奥に一時作られた「古昔戦没将士供養の塔」に並んでいましたが、現在は東光寺に移されました。」→その後、等覚寺へ移設。

◇出土した古道と千代塚候補地その 2

平成八年（1996）のマンション建設に伴う発掘調査では、江ノ島道との伝承を持つ道路遺構が報告されている（田代 2002）。この道は湘南町屋駅の対面の山頂（富士塚）から南に延びる尾根線上に位置し、道を西に延ばせば湘南モノレールを挟み、富士塚小学校付近の尾根線上を進むルートとなる。このルートは道が失われた現在でも梶原と山崎を分ける地境となっている。『鎌倉 - 史跡巡り会の記録』に掲載される昭和十五年開催の第 89 回「千代塚を尋ねて」には、この辺りの詳細が記される（沢 1972）。史跡巡り会は西瓜ヶ谷の尾根線上から台の富士塚付近まで歩き、付近の住人の案内により千代塚を確認したと記す。これらの記録の通りに地図を辿ると現在富士塚付近には住宅街が広がり、富士塚以外に塚と呼べるような丘陵は現存しないが、国土地理院発行の大正十年（1921）の測量地図には富士塚付近にもう一つの三角点が記載されており、位置は史跡巡り会の記述ともおおよそ合致する。



『第 32 回鎌倉市遺跡発表会』資料より引用

◇陣出の発掘調査

調査区から竪穴建物跡 4 軒、溝 1 条、土坑・その他の遺構 7 基が確認され、出土遺物は土師器の甕、坏、須恵器の甕、坏、石製品などがあり、帰属年代は平安時代（9 世紀）と推定された。追加調査としてほぼ全面を表土下約 1.9~3.9m まで掘削し、縄文石器（剥片）・弥生土器・古墳後期土師器・土師器・須恵器・灰釉陶器・中世の陶器など古代の遺構と遺物だけでなく、古墳時代や弥生時代の土器、縄文時代の土器や石器が出土し、長期間にわたって生活の場であったことが判明（株式会社イビソクの報告）。

参考文献

鈴木棠三ほか 1984「神奈川県の名」『歴史地名大系』平凡社

田代郁夫ほか 2002「寺分藤塚遺跡」『鎌倉の横穴墓 - 調査報告と資料集成 -』東国歴史考古学研究所

上本進二 2004「鎌倉の地形発達史」『国立歴史民俗博物館研究報告』118-4

三浦勝男ほか 2005『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版

古田土俊一 2013「鎌倉の道と新田義貞の鎌倉攻め小考」『かまくら考古』19号 NPO 鎌倉考古学研究所

境雅仁・玉城雄一 2023『鎌倉市 藤塚西やぐら群』鎌倉市・株式会社イビソク

国土地理院地図・空中写真閲覧サービス <https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>